

# 外科室

泉鏡花

青空文庫



## 上

実は好奇心のゆえに、しかれども予は予が画師<sup>えし</sup>たるを利器として、ともかくも口実を設けつつ、予と兄弟もただならざる医学士高峰をしいて、某<sup>それ</sup>の日東京府下の一病院<sup>ある</sup>において、渠<sup>かれ</sup>が刀<sup>とう</sup>を下すべき、貴船伯爵<sup>きふね</sup>夫人の手術をば予をして見せしむることを余儀なくしたり。

その日午前九時過ぐるころ家を出<sup>い</sup>でて病院に腕車<sup>わんしゃ</sup>を飛ばしつ。直ちに外科室<sup>かた</sup>の方に赴<sup>おもむ</sup>くとき、むこうより戸を排してすらすらと出で来たれる華族の小間使とも見ゆる容目<sup>みめ</sup>よき婦人<sup>おんな</sup>二、三人と、

廊下の半ばに行き違えり。

見れば渠らの間には、被布着たる一個七、八歳の娘を擁しつ、見送るほどに見えずなれり。これのみならず玄関より外科室、外科室より二階なる病室に通うあいだの長き廊下には、フロツクコトト着たる紳士、制服着けたる武官、あるいは羽織袴はかまの扮装いでたちの人物、その他、貴婦人令嬢等いずれもただならず気高きが、あなたに行き違ひ、こなたに落ち合い、あるいは歩し、あるいは停し、往復あたかも織るがごとし。予は今門前において見たる数台すだいの馬車に思い合せて、ひそかに心に領けりうなず。渠らのある者は沈痛に、ある者は憂慮きづかわしげに、はたある者はあわただしげに、いずれも顔色穏やかならで、忙せわしげなる小刻みの靴くつの音、草履ぞうりの響き、一

種寂<sup>せき</sup>寞<sup>ぼく</sup>たる病院の高き天井と、広き建具と、長き廊下との間に、異様の<sup>き</sup>磬<sup>ようおん</sup>音を響かしつつ、うたた陰惨の趣をなせり。

予はしばらくして外科室に入りぬ。

ときに予と相目して、脣<sup>しんべん</sup>辺に微笑を浮かべたる医学士は、両手を組みてややあおむけに椅子<sup>いす</sup>に凭<sup>よ</sup>れり。今にはじめぬことながら、ほとんどわが国の上流社会全体の喜憂に関すべき、この大なる責任<sup>に</sup>を荷<sup>にな</sup>える身の、あたかも晩<sup>ばん</sup>餐<sup>さん</sup>の筵<sup>むしろ</sup>に望みたるごとく、平然としてひややかなること、おそらく渠のごときはまれなるべし。助手三人と、立ち会いの医博士一人と、別に赤十字の看護婦五名あり。看護婦その者にして、胸に勲章帯びたるも見受けたるが、あるやんごとなきあたりより特に下したまえるもありぞと思

わる。他に女によしやう性せいとしてはあらざりし。なにがし公と、なにがし侯と、なにがし伯と、みな立ち会いの親族なり。しかして一種形容すべからざるおももち面色おもちにて、愁然として立ちたるこそ、病者の夫の伯爵なれ。

室内のこの人々にみまも瞻みまもられ、室外のあのかたがたに憂慮きづかわれて、塵ちりをも数うべく、明るくして、しかもなんとなくすさまじく侵すべからざるとき観あるところの外科室の中央に据えられたる、手術台なる伯爵夫人は、純潔なる白びやくえ衣まを絡まいて、死骸しがいのごとく横たわれる、顔の色あくまで白く、鼻高く、頤おとが細いりて手足は綾りよう羅らにだも堪えざるべし。唇くちびるの色少しく褪あせたるに、玉のごとき前歯かすかに見え、眼めは固く閉ざしたるが、眉まゆは思いなしか顰ひそみ

て見られつ。わずかに束ねたる頭髮は、ふさふさと枕まくらに乱れて、台の上にごぼれたり。

そのかよわげに、かつ気高く、清く、貴とうとく、うるわしき病者のおもかげ梯を一目見るより、予は慄然りっぜんとして寒さを感じぬ。

医学士はと、ふと見れば、渠は露ほどの感情をも動かしおらざるもののごとく、虚心に平然たる状露さまあらわれて、椅子に坐すわりたるは室内にただ渠のみなり。そのいたく落ち着きたる、これを頼もしと謂いわば謂え、伯爵夫人の爾しかき容体を見たる予が眼よりはむしろ心憎きばかりなりしなり。

おりからしとやかに戸を排して、静かにここに入り来たれるは、先刻さきに廊下にて行き逢いたりし三人の腰元の中に、ひとときわ目立

ちし婦人おんななり。

そと貴船伯に打ち向かいて、沈みたる音調もて、

「御前ごぜん、姫様ひいさまはようようお泣き止やみあそばして、別室におとな

しゆういらつしやいます」

伯はものいわでうなず頷けり。

看護婦はわが医学士の前に進みて、

「それでは、あなた」

「よろしい」

と一言答へたる医学士の声は、このとき少しく震いを帯びてぞ予が耳には達したる。その顔色はいかにしけん、にわかになん少しく変わりたり。

さてはいかなる医学士も、驚破すわという場合に望みては、さすがに懸念のなからんやと、予は同情を表ひようしたりき。

看護婦は医学士の旨を領してのち、かの腰元に立ち向かいて、  
「もう、なんですから、あのことを、ちよつと、あなたから」

腰元はその意を得て、手術台に擦すり寄りつ、優ひぎに膝のあたりまで両手を下げて、しとやかに立礼し、

「夫人おくさま、ただいま、お薬を差し上げます。どうぞそれを、お聞きあそばして、いろはでも、数字でも、お算かぞえあそばしますように」

伯爵夫人は答なし。

腰元は恐る恐る繰り返して、

「お聞き済みでございましたか」

「ああ」とばかり答えたまう。

念を推して、

「それではよろしゅうございますね」

「何かい、ねむりぐすり麻酔剤をかい」

「はい、手術の済みますまで、ちよつとの間でございますが、御げ寝しなりません、いけませんそうです」

夫人は黙して考えたるが、

「いや、よそうよ」と謂いえる声は判然として聞こえたり。一同顔を見合わせぬ。

腰元は、さと諭すがごとく、

「それでは夫人、御療治ができません」

「はあ、できなくつてもいいよ」

腰元は言葉はなくて、顧みて伯爵の色を伺えり。伯爵は前に進み、

「奥、そんな無理を謂つてはいけません。できなくつてもいいということがあるものか。わがまを謂つてはなりません」

侯爵はまたかたわらより口を挟めり。

「あまり、無理をお謂やったら、姫ひいを連れて来て見せるがいいの。疾はやくよくならんでどうするものか」

「はい」

「それでは御得心でございますか」

腰元はその間に周旋せり。夫人は重げなる頭かぶりを掉ふりぬ。看護婦の一人は優しき声にて、

「なぜ、そんなにおきらいあそばすの、ちつともいやなもんじやございせんよ。うとうとあそばすと、すぐ済んでしまいます」  
このとき夫人の眉まゆは動き、口は曲ゆがみて、瞬間苦痛に堪えざるごとくなりし。半ば目を睜みひらきて、

「そんなに強しいるなら仕方がない。私はね、心に一つ秘密がある。麻酔ねむりぐすり剤は謔うわごと言を謂いうと申すから、それがこわくつてなりません。どうぞもう、眠らずにお療治ができないようなら、もうもう快なおらんでもいい、よしてください」

聞くがごとくんば、伯爵夫人は、意中の秘密を夢ゆめ現うつの間に

人に眩つぶやかんことを恐れて、死をもてこれを守ろうとするなり。良お人たる者がこれを聞ける胸中いかん。この言ことばをしてもし平生にあらしめば必ず一条の紛ふんぬん紘ひを惹き起こすに相違なきも、病者に対して看護の地位に立てる者はなんらのこともこれを不問に帰せざるべからず。しかもわが口よりして、あからさまに秘密ありて人に聞かしむることを得ずと、断だんこ乎として謂い出だせる、夫人の胸中を推すれば。

伯爵は温おんこ乎として、

「わしにも、聞かされぬことなんか。え、奥」

「はい。だれにも聞かすことはなりません」

夫人は決然たるものありき。

「何も麻酔ますいざい剤を嗅かいだからって、謔言たぶ言を謂うという、極きまったこと  
ともなさそうじゃの」

「いいえ、このくらい思つていれば、きつと謂いますに違いありません」

「そんな、また、無理を謂う」

「もう、御免くださいまし」

投げ棄つるがごとくかく謂いつつ、伯爵夫人は寝返りして、横そむに背かんとしたりしが、病める身のままならで、齒を鳴らす音聞こえたり。

ために顔の色の動かざる者は、ただあの医学士一人あるのみ。  
渠さきは先刻さきにいかにしけん、ひとたびその平生しづを失せしが、いまや

また自若となりたり。

侯爵は洩面造りて、

「貴船、こりやなんでも姫ひいを連れて来て、見せることじやの、なんぼでも兎このかわいさには我が折れよう」

伯爵は頷きて、

「これ、綾あや」

「は」と腰元は振り返る。

「何を、姫を連れて来い」

夫人は堪たまらず遮さへぎりて、

「綾、連れて来んでもいい。なぜ、眠らなけりや、療治はできな

いか」

看護婦は窮したる微笑えみを含みて、

「お胸を少し切りますので、お動きあそばしちやあ、危険けんでございます」

「なに、わたしや、じつとしている。動きやあしないから、切つておくれ」

予はそのあまりの無邪気さに、覚えぬ森寒を禁じ得ざりき。おそらく今日の切開術ききょうは、眼を開きてこれを見るものあらじと思えるをや。

看護婦はまた謂えり。

「それは夫人おくさま、いくらなんでもちつとはお痛みあそばしましよ  
うから、爪つめをお取りあそばすとは違いますよ」

夫人はここにおいてぱつちりと眼を睜ひらけり。気もたしかになりけん、声は凜りんとして、

「刀とうを取る先生は、高峰様だろうね！」

「はい、外科科長です。いくら高峰様でも痛くなくお切り申すことはできません」

「いいよ、痛かあないよ」

「夫人ふじん、あなたの御病気はそんな手軽いではありません。肉を殺そいで、骨を削るのです。ちつとの間御辛抱なさい」

臨検の医博士はいまはじめてかく謂えり。これとうてい関雲長にあらざるよりは、堪えうべきことにあらず。しかるに夫人は驚く色なし。

「そのことは存じております。でもちつともかまいません」

「あんまり大病なんで、どうかしおつたと思われる」

と伯爵は愁然たり。侯爵は、かたわらより、

「ともかく、今日はまあ見合わすとしたらどうじゃの。あとでゆつくりと謂い聞かすがよかろう」

伯爵は一議もなく、衆みなこれに同ずるを見て、かの医博士は遮りぬ。

「ひとときおく一時後れては、取り返しがありません。いったい、あなたがたは病をけいべつ軽蔑しておらるるからうち埒あかん。感情をとやくいうのはこそく姑息です。看護婦ちよつとお押え申せ」

いとおごそ厳かなる命のもとに五名の看護婦はバラバラと夫人を囲み

て、その手と足を押えんとせり。渠らは服従をもつて責任とす。単に、医師の命をだに奉ずればよし、あえて他の感情を顧みることとを要せざるなり。

「綾！ 来ておくれ。あれ！」

と夫人は絶え入る呼吸いきにて、腰元を呼びたまえば、慌あわてて看護婦を遮りて、

「まあ、ちよつと待つてください。夫人おくさま、どうぞ、御堪忍あそばして」と優しき腰元はおろおろ声。

夫人の面は蒼然そうぜんとして、

「どうしても肯ききませんか。それじゃ全快なおつても死んでしまします。いいからこのままです手術をなさいと申すのに」

と真白く細き手を動かし、かろうじて衣紋を少し寛げつつ、玉のごとき胸部を躪わし、

「さ、殺されても痛かあない。ちつとも動きやしないから、だいたいようぶだよ。切つてもいい」

決然として言い放てる、辞色ともに動かすべからず。さすが高位の御身とて、威厳あたりを払うにぞ、満堂齊しく声を呑み、高き咳をも漏らさずして、寂然たりしその瞬間、先刻よりちとの身動きだもせで、死灰のごとく、見えたる高峰、軽く見を起こして椅子を離れ、

「看護婦、メスを」

「ええ」と看護婦の一人は、目を睜りて猶予えり。一同齊しく愕

然<sup>くぜん</sup>として、医学士の面を瞻<sup>みまも</sup>るとき、他の一人の看護婦は少しく震えながら、消毒したるメスを取りてこれを高峰に渡したり。

医学士は取るとそのまま、靴<sup>くつ</sup>音<sup>おと</sup>軽く歩を移してつと手術台に近接せり。

看護婦はおどおどしながら、

「先生、このままでいいんですか」

「ああ、いいだろう」

「じゃあ、お押え申しましょう」

医学士はちよつと手を挙<sup>あ</sup>げて、軽く押し留<sup>とど</sup>め、

「なに、それにも及ぶまい」

謂う時疾<sup>はや</sup>くその手はすでに病者の胸を搔<sup>か</sup>き開<sup>あ</sup>けたり。夫人は両

手を肩に組み、身動きだもせず。

かかりしとき医学士は、誓うがごとく、深重厳肅たる音調もて、  
「夫人、責任を負つて手術します」

ときに高峰の風采ふうさいは一種神聖にして犯すべからざる異様のものにてありしなり。

「どうぞ」と一言答いえたる、夫人が蒼白なる両の頬ほに刷はけるがごとき紅を潮しつ。じつと高峰を見詰めたるまま、胸に臨めるナイフにも眼まなこを塞ふさがんとはなさざりき。

と見れば雪の寒紅梅、血汐ちしおは胸よりつと流れて、きと白衣びやくえを染むるとともに、夫人の顔はもとのごとく、いと蒼あお白しろくなりけるが、はたせるかな自若として、足の指をも動かさざりき。

ことのここに及べるまで、医学士の挙動脱兎のごとく神速にし  
 ていささか間なく、伯爵夫人の胸を割くや、一同はもとよりの  
 医博士に到るまで、言を挟むべき寸隙とてもなかりしなるが、  
 ここにおいてか、わななくあり、面を蔽うあり、背向になるあり、  
 あるいは首を低るるあり、予のごとき、われを忘れて、ほとんど  
 心臓まで寒くなりぬ。

三秒にして渠が手術は、ハヤその佳境に進みつつ、メス骨に達  
 すと覚しきとき、

「あ」と深刻なる声を絞りて、二十日以来寝返りさえもえせずと  
 聞きたる、夫人は俄然器械のごとく、その半身を跳ね起きつつ、  
 刀取れる高峰が右手の腕に両手をしかと取り継りぬ。

「痛みますか」

「いいえ、あなただから、あなただから」

かく言い懸かけて伯爵夫人は、がつくりと仰向あおむきつつ、凄冷極せいいきわ

まりなき最後の眼まなこに、国手こくしゆをじつと瞻みまりて、

「でも、あなたは、あなたは、私わたくしを知りますまい！」

謂いうとき晚おそし、高峰が手にせるメスに片手を添えて、乳の下深

く搔かき切りぬ。医学士は真蒼まっさおになりて戦おのきつつ、

「忘れません」

その声、その呼吸いき、その姿、その声、その呼吸、その姿。伯爵

夫人はうれしげに、いとあどけなき微笑えみを含みて高峰の手より手

をはなし、ばったり、枕に伏すとぞ見えし、脣くちびるの色変わりたり。

そのときの二人が状さま、あたかも二人の身边には、天なく、地なく、社会なく、全く人なきがごとくなりし。

## 下

数うれば、はや九年前なり。高峰がそのころはまだ医科大学に学生なりしみぎりなりき。一日予は渠あるひとともに、小石川なる植物園に散策しつ。五月五日躑躅つつじの花盛んなりし。渠とともに手を携え、芳草の間を出つ、入りつ、園内の公園なる池を繞めぐりて、咲き揃そろいたる藤ふじを見つ。

歩を転じてかしかなる躑躅の丘に上らんとて、池に添いつつ歩

めるとき、かなたより来たりたる、一群れの観客あり。

ひとり一個洋服の扮装にて煙突帽を戴きたる蓄髯の漢前衛して、

中に三人の婦人を囲みて、後よりもまた同一様なる漢来れり。渠

らは貴族の御者なりし。中なる三人の婦人等は、一様に深張り

の涼傘を指し翳して、裾捌きの音いとさやかに、するすると練

り来たれる、と行き違いざま高峰は、思わず後を見返りたり。

「見たか」

高峰は頷きぬ。「むむ」

かくて丘に上りて躑躅を見たり。躑躅は美なりしなり。されど

ただ赤かりしのみ。

かたわらのベンチに腰懸けたる、商 人体の壯者あり。

「吉さん、今日はいいことをしたぜなあ」

「そうさね、たまにやおまえの謂うことを聞くもいいかな、浅草へ行ってここへ来なかつたらうもんなら、拝まれるんじやなかつたつけ」

「なにしろ、三人とも揃つてらあ、どれが桃やら桜やらだ」

「一人は丸まるまげ鬚じやあないか」

「どのみちはや御相談になるんじやなし、丸鬚でも、束髪でも、ないししやぐまでもなんでもいい」

「ところごと、あのふうじやあ、ぜひ、高島田ぶんぎんとくるところを、

銀杏いちようと出たなあどういう気だろう」

「銀杏、合点がてんがいかなかい」

「ええ、わりい洒落だ<sup>しやれ</sup>」

「なんでも、あなたがたがお忍びで、目立たぬようという肚だ<sup>はら</sup>。ね、それ、まん中の水ぎわが立ってたろう。いま一人が影武者と  
いうのだ」

「そこでお召し物はなんと踏んだ」

「藤色と踏んだよ」

「え、藤色とばかりじゃ、本読みが納まらねえぜ。足下<sup>そこ</sup>のようでもないじゃないか」

「<sup>まぼゆ</sup>眩くつてうなだれたね、おのずと<sup>あたま</sup>天窓が上がらなかつた」

「そこで帯から下へ目をつけたろう」

「ばかをいわっし、もつたいない。見しやそれとも分かぬ間だつ

たよ。ああ残り惜しい」

「あのまた、歩行あるきぶりといったらなかつたよ。ただもう、すうつとこかすみう霞に乗って行くようだっけ。裾捌き、棲つまはずれなんということ、なるほどと見たは今日がはじめてよ。どうもお育ちがらはまた格別違つたもんだ。ありやもう自然、天然と雲うんじよう上になつたんだな。どうして下界のやつばらが真似まねようたつてできるものか」

「ひどくいな」

「ほんのこつたがわつしやそれご存じのとおり、北廓なかを三年が間、金毘羅こんぴら様に断たつたというもんだ。ところが、なんのこたあない。肌守はだりを懸けて、夜中に土堤どてを通ろうじやあないか。罰のあたり

ないのが不思議さね。もうもう今日という今日は発心切った。あの醜婦すべつたどもどうするものか。見なさい、アレアレちらほらとこうそこいらに、赤いものがちらつくが、どうだ。まるでそら、芥塵みか、蛆うじが蠢うごめいているように見えるじゃあないか。ばかばかしい」

「これはきびしいね」

「串じょうだん 戯じじゃあない。あれ見な、やっぱりそれ、手があつて、

足で立つて、着物も羽織もぞろりとお召しで、おんなじような蝠こ傘うもりがさで立つてるところは、憚はばかりながらこれ人間の女だ。しかも

女の新造しんぞだ。女の新造に違いはないが、今拝んだのと較くらべて、どうだい。まるでもつて、くすぶつて、なんといいか汚よごれ切

つていらあ。あれでもおんなじ女だつき、へん、聞いて呆れら<sup>あき</sup>い」

「おやおや、どうした大変なことを謂い出したぜ。しかし全くだよ。私もさ、今まではこう、ちよいとした女を見ると、ついそのなんだ。いっしょに歩くおまえにも、ずいぶん迷惑を懸けたつけど、今のを見てもうもう胸がすつきりした。なんだかせいせいとする、以来女はふつつりだ」

「それじゃあ生<sup>しょうがい</sup>涯<sup>がい</sup>ありつけまいぜ。源吉とやら、みずからは、とあの姫<sup>ひいさま</sup>様が、言いそうもないからね」

「罰があたりあ、あてこともない」

「でも、あなたやあ、ときたらどうする」

「正直なところ、わっしは遁<sup>に</sup>げるよ」

「足下そこもか」

「え、君は」

「私も遁げるよ」と目を合わせつ。しばらく言途ことば絶えたり。

「高峰、ちつと歩こうか」

予は高峰とともに立ち上がりて、遠くかの壮佼わかものを離れしとき、  
高峰はさも感じたる面色おももちにて、

「ああ、真の美の人を動かすことあのとおりさ、君はお手のもの  
だ、勉強したまえ」

予は画師たるがゆえに動かされぬ。行くこと数す百歩、あの樟くすの  
大樹うつつの鬱うつつ 蔭おうたる木この下した 蔭かげの、やや薄暗きあたりを  
行く藤色きぬの衣きぬの端を遠くよりちらとぞ見たる。

園を出ずれば丈高く肥えたる馬二頭立ちて、磨りガラス入りたる馬車に、三個の馬丁休らいたりき。その後九年を経て病院のかのことありしまで、高峰はかの婦人のことにつきて、予にすらくこと一言をも語らざりしかど、年齢においても、地位においても、高峰は室あらざるべからざる身なるにもかかわらず、家を納むる夫人なく、しかも渠は学生たりし時代より品行いっそう謹厳にてありしなり。予は多くを謂わざるべし。

青山の墓地と、谷中の墓地と所こそは変わりたれ、同一日に前後して相逝けり。

語を寄す、天下の宗教家、渠ら二人は罪惡ありて、天に行くことを得ざるべきか。



# 青空文庫情報

底本：「高野聖」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年4月20日改版初版発行

1979（昭和54）年11月30日改版第14刷発行

入力：今中一時

校正：浜野 智

1998年8月6日作成

2012年10月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# 外科室

## 泉鏡花

2020年 7月13日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>